

平成30年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 ひびきが丘 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生については、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率								
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・「話すこと・聞くこと」に関する問題の正答率は全国平均に近づいていた。 ・「書く力」や「読む力」を問う問題に課題があり、目的に応じて必要な情報を捉えたり、文を正しく書いたりすることを習慣化する必要がある。
	よってきた問題	・日常生活で使われている慣用語の意味を理解し、使う問題の正答率は高かった。
	努力が必要な問題	・文における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書く問題の正答率が低かった。
国語B	全体的な傾向や特徴など	・無回答率は低く、自分の考えを書く態度は育っている。 ・文章を読み、自分の考えや意見を記述する問題の正答率が低い傾向にある。
	よってきた問題	・文章を読み、「そのように書いた理由として適切なもの」や「その説明として適切なもの」を選択する問題の正答率は全国平均とほぼ同程度であった。
	努力が必要な問題	目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして、詳しく書く問題の正答率が低かった。
算数A	全体的な傾向や特徴など	・とくに1に当たる数の大きさを求める問題場面で、「数直線上に表すこと」や「除数が小数の場合の除法の立式を理解する」問題の正答率が低かった。 ・無回答率は低く、問題を最後まで解こうとする態度は育っている。
	よってきた問題	・一方の量がそろっているときの混み具合の比べ方の問題や角の大きさの理解をみる問題の正答率は高かった。
	努力が必要な問題	・図形領域の問題に課題が見られる。特に、円の直径の長さと同径の長さの関係についての問題の正答率が低かった。
算数B	全体的な傾向や特徴など	・「量と測定」と「図形」の領域の正答率が低かった。 ・無回答率は低く、規則性を解釈して判断したり、情報を解釈して答えを求めたりする問題の正答率は全国平均と同程度であった。
	よってきた問題	・折紙の輪の色の規則性を解釈し、それを基に条件に合う色を判断する問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	・図形の構成要素や性質に着目して角の大きさの和の理由を記述する問題や、メモの情報とグラフを関連付け、それぞれのメモの着目点の違いを解釈し、それに基づいて記述をする問題の正答率が低かった。
理科	全体的な傾向や特徴など	・「知識」に関する問題はおおむねできていたが、「活用」に関する問題は課題が見られる。 ・調べた結果について考察する際に、問題に対応した視点で記述したり、その内容を記述したりする問題に苦手意識が見られた。
	よってきた問題	・ろ過の適切な操作方法を選択したり、海水と水道水を区別するために、2つの異なる方法の実験結果を分析したりする問題の正答率は高かった。
	努力が必要な問題	・モーターの回転が逆になる回路を選んだり、自分の考えと異なる他者の予想を基に、検流計の針の向きと目盛りを選ぶ問題の正答率が低かった。

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査の結果分析
<p>・全学級でめあてとまとめ、振り返りを意識した学習展開の工夫及び、話し合いの場の工夫(活動場面・視点等)により、「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立などを工夫して発表していますか」や「学級の友達との間で話し合う活動を通じて自分の考えを広げたり深めたりしていますか」の問いに対して肯定的な回答をした児童が増えている。</p> <p>・「地域の行事に参加している」や「地域・社会の出来事に関心がある」児童の割合が増えている。今後、さらに継続して、PTAや地域と連携しながら、児童・保護者に啓発するとともに、地域とのつながりの大切さを価値付けていく。</p> <p>・「毎日同じくらいの時刻に寝ていますか」「起きていますか」の問いが全国平均に対して低い傾向がある。今後、PTAと連携しながら、PTA理事会・学校(学級)通信、懇談会等で、児童・保護者に啓発していく。</p>

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

全校では、学習の流れを明確にしなが、どの教科においても自分の考えや本時のまとめを書く時間を設定する。学年では、既習学習の見直しや補充ができるように、朝自習・家庭学習を中心に基礎基本定着シートを活用する。学級では、日々の学習や単元末テスト、基礎基本定着シートなどを活用して、学級の課題を明確にとらえて指導し定着を図る。

② 家庭生活習慣等に関する取組

日々の学級指導だけではなく、学級活動や学校行事の中で、とくに「日常の生活や学習への適応」や「健康安全行事」と関連付けながら、継続的に児童へ指導していく。学校(学級)通信や保健だより・PTAだより等を通して、学習習慣・生活習慣の見直しと改善を保護者へ啓発していく。